

悪人製造の五則

子供の魂は軟らかである。動きやすく変りやすく感じやすい。一步誤れば大変なものになる。人の子の親は不知不識しらずしらずの間にこの軟らかな魂の芽をつみとり、傷つけ、萎縮させ、芯しんをとめ、悪くする。どうしたら悪くなるのか悪人製造の方法を考える。

一。頭から「馬鹿ばか!」「阿呆あほう!」「ボンクラ」と叱ることである。たびたび聞かしていると、馬鹿になること、阿呆になること、ボンクラになること確実。もと、よくできていた子供がどうかしたことで一週間ほど算術ができない、いつも神のごとく尊敬する先生が「君は馬鹿だね、お前には算術の頭はないじゃないか」と叱る。子供は催眠術にかかったように、ほんとうにできなくなる。

私の母は私を打ちなぐって叱ったが「お前は馬鹿になる」と言ったことはない。昔の先生が作文の評に「文章の天才なり」と書いてくれた。私はうれしかった。だがその作文の点は八十点だった。いいところをひき出そうとする、親や師の苦心だ。

一。することなすこと一つ一つに干渉すること。そうすれば、優柔不断な無気力者か、自暴自棄の反抗心にみちた悪者かができる。畑の作物は虫がついていず、いらぬ枝がのびないかぎり、ほっておくこと。角をためて牛を殺すの愚をさけること。

一。善いことをしても賢いことをしてもほめぬこと。子供は極端な見栄坊である。親の一口の褒めことばは、天来の妙音、ほめられての感激は、他日百倍千倍になって返る。しかし石川五右衛門は他処よその鉄はさまをとって帰ってほめられ、聖者源信は十六歳にして宮中に経を講じ、帝よりご褒美を賜り有頂天うちようてんになった時、名利に墜落せるものとして母に叱られた。ほめると叱るは一体である。「可愛くば二つ叱って三つほめ、五つ教えてよき人にせよ。」

一。羞恥心はじめしころを破ること。孟子は「惻陰之心仁端也。羞惡之心義之端也。」と言っている。惻陰とはあわれみいたむころ、羞恥は悪をはじめるころ、この二つの心が仁義のもとだというのである。羞恥心は誰でももって生まれる。しかし悪を行った時、その全体を白状させ、さらに多数の前に発表し、前科者として冷遇されると、ついにはこの悪を恥じる心を失う。羞惡心の処女性じゆうりんを蹂躪じゆうりんすることほど恐ろしいことはない。悪にむかつて鉄面皮てつめんぴになった者には、若き日のどこかにその記録がある。他人ひとの過去の悪はかくしてやること。

一。冷たく裁いて愛せぬこと。悪人を作る根本原則である。人は本来悪を好むものではない。善を好みつつ悪に陥る。その本人ささえいかに如何ともすることのできない鋭い心はいかにして培われるか。冷たき環境で、その心霊の扉をとぎすことだ。社会の冷たさが刻々に闘争心を生みだす、家庭の冷たさが悪人を作る。真の人間生活は、冷

たき裁きによつて成立しないで、温かき愛が創造する。悪人正機の聖人の世界が、道義から見た人間文化の基調でなければならぬ。

親の心

一月十二日午前三時五十七分、広島県河内町では、棕梨川鉄橋において列車転覆の大惨事をおこした。河内町こぞつての献身的活動を聞いた時、まぶたが熱くなつた。下り列車を二百メートルの近くで合図に成功して止め得た駅員の天晴れのはたらき。わけて痛ましいのは一家五人遭難、東京桜田小学校首席訓導西山政一氏の一家の最期、故郷佐賀県に帰り、東京への帰途、妻いちこは即死、次男政憲は頭部を砕き手当て中死亡、長男憲男は重傷、長女はる子は軽傷、政一氏は妻の死は知っていたが二男の死は秘して知らされなかつたため、すでに死んでいることも知らずに、重傷の悩みとうわごとを言いつつ、死んだわが子の額ひたいに手をあてながら、その回復を祈っていた。・・・人の世の悲惨事。

小さい覚悟

くるしいことがある。
じつと忍べ、火傷をじつとおさえて忍ぶ時の気持で、
新しい道がきつと開いて来るから・・・
この小さい覚悟が、行詰つた私を何度開いてくれたことだろうか。

禍福

釈尊は説いて言われる。
迦葉かじょうよ。一人の容麗かたちうるわしい女があつて、着飾つて他の家を訪ねたが、その家の主人は問うた。

「汝なんじはだれであるか」

「私は功德天である。」

「何をするのか。」

「私はいたる処に宝を与えるのである。」

これを聞いて主人は喜び、その女を客間へ導き、香をたき花を撒まいてもてなした。しかるに間もなくして、また一人の女が門前に立つた。まことにいやしい形装なりざりで、肌は破れ、衣もまた垢あかづいてゐる。主人は言う。

「汝はだれであるか。」

「私は黒闇天である。」

「何をするのか。」

「私はいたる所の家から、その宝をなくするものである。」

これを聞いた主人は刀をふりあげて、

「出て行け、行かねば殺す。」

と言つた。しかるに女は

「おお汝は愚かな人である。今汝の家に入ったのは私の姉である。私はいつも姉と離れずにいるのであるから、私を追い出せば一緒に姉をも追い出すことになるであろう。」

と言うので、主人は家にかけてこみ、このことを功德天に尋ねた。功德天は、

「いかにもその通りである。私を愛するならば、妹をも愛してくれ。」

と言うので、主人はついに二人を追い出した。二人の女は、つぎにある貧しい家に行った。ここでは喜んで、二人を内に招いたということである。